

小田実全集（小説 第38巻）

子供たちの戦争



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

青竜刀とブルマース	7
男と女	35
城と藁草履	65
匂いと臭い	97
亀と五重塔	127
軍艦と恋	159
童児と童女	191

子供たちの戦争

青竜刀とブルマース

健は昼間いやなことがあると、夜きまつて女の子になつた夢を見た。それも白いシャツ・ブラウスを着て、下に濃紺のブルマースを穿いた女の子だ。年齢は彼と同じくらい。寢床に入つてしばらく眼を閉じて、その体操服の女の子になつた自分を思い浮かべた。そのうち眠くなつて、あとはようやく安心して眠ることができた。そして、それがそのまま夢になつてゐる。

夢のなかにそんなかつこうでいると、まるでまるで裸かで立つてゐるような無防備で頼りなげな気がした。いつなんどき誰に襲われるかも知れない。風は四方から容赦なく吹いて来た。体操服の女の子になつた健を護るものは何ひとつなかつた。彼は白いシャツ・ブラウスの短かい袖から突き出た細い、長い腕を必死に胸で組んで前かがみになつて背中で風を受けて、頼りなげに立つてゐるよりほかになかつた。濃紺のブルマースの下に伸びる同じように細い、長い脚に風はぶち当つて、彼は何度もよろけそうになつた。こまかな砂つぶも細い、長い脚に切れ目なく当つて来て、痛かつた。

その彼をみんなが見ていた。今にもそんなふうにな女の子のかつこうをしてほほんとうは男であることが見破られそう、健は落ちつかなかつた。いや、もうみんなは見破つていた。「おい、ヨワシ、なんや、男のくせにブルマースなんか穿きやがつて。」長沼バクダンが馬鹿声をはり上げた。「ヨワシ」は、健の名の「タケシ」をもじつた彼の渾名だ。バクダンがつけて、彼が自分を通してはやらした。「どうや、この渾名、名が実をあらわしとるやろ。」彼はときどき自慢げに健に言った。バクダンがそう馬鹿声でわめきたてると、クロチビ、ドンスケ、イシャの子分連中が「おまえ、そんな女の

子のかつこうして恥ずかしくないのか」といつせいはやしたてる。そして、その彼らのうしろで、こわごわのぞき込んでいた教室のみんなが笑い出す。吉岡先生まで、そこにいていつしよに笑っている。恥ずかしかつた。男のくせに女の子のかつこうをするなんてことは、言われずとも恥ずかしいことだ。からだか恥ずかしさで熱くなっていた。頬が火照った。消え失せたい気がした。しかし、同時に、恥ずかしさの底に異様にこちよいものがあるのを健はこれも全身で感じとっていた。とらえどころのない、じんわりと生まあたたい気持のいいものだ。それがからだの底から湧き上つて来て、からだを、奇妙な言い方だが、内側から包み込んだ。そんな気がしていた。

気がつくと、みんなは静かになっていた。もうわめきたてる者もいなければ、笑う者もない。みんなは奇妙に押し黙って健を見ている。すぐ判つたのは、今はもうみんながほんとうに女の子を見る眼で健を見ていることだ。健も顔を上げた。もう眼を伏せてなどしていなかった。(そうよ、うちは女の子よ)とはつきり心のなかで言いながら、健はまっすぐにまわりのみんなを見た。見まわした。まず、長沼バクダン、ついで、クロチビ、ドンスケ、イシヤ、さらには彼らのうしろのみんな。

健が大きく眼を見開いて、ひとりひとり、まっすぐにみつめて行くと、おどろいたことに、誰も彼もが慌てふためいたように眼を伏せたり、そらせたりした。なかには健にみつめられて顔をあかくするのまでがいた。そのひとりが、健がまず第一にみつめたバクダンだった。健が——いや、体操服の女の子になった健が、女の子みたいにきれいな切れ長の二重^{ふたえ}瞼や、と近所のおばさんに言われたことのある眼をまっすぐに彼にむけると、バクダンはほんとうに顔を真赤にして慌ててそっぽをむいた。ざまあみやがれ、と健は勝ち誇った気になった。(うちはほんまに女の子やで。女の子が女の子のかつ

こうをして何がわるいねん」と心のなかで何度もくり返した。あまり力を込めてそう言ったので、体操服でスックと彼のまえに立つ健のからだは大きく揺れた。いつのまにかいつもはイガ栗頭の健の頭に髪が生えてオカツパ頭になっているらしくて、両頬に垂れ下った髪の毛——女の子の髪の毛がゆさゆさと揺れ動いた。そのやわらかな感触を健ははつきり感じとった。

すべてがよくなっていた。

長沼バクダンに「なんじゃ、おまえの手足、女みたいに細いやないか。そんなもんで鉄砲持てるか。突撃できるか」といくら言われても、もう健は女の子なのだ。かまうことはなかった。白いシャツ・ブラウスの短かい袖から突き出た腕と濃紺のブルマースの下から伸びた脚がどちらもどんなに細い、長いものであっても、その細い、長い腕も脚も、彼のきれいな切れ長の二重瞼同様、女の子なら、かえってかっこうがよくていいものなのだ。健は色が白くて、手首から蒼い血管が透けて見えたりして、これは医者の子のイシヤに眼ざとく見つけられて、「ヨワシ、おまえはほんまに女の子みたいやで」と言われたりしたことがあるのだが、それももうかまうことはなかった。健は女の子みたいではなかった。もうまぎれもない女の子だ。

まぎれもない女の子の彼に、吉岡先生も「おまえ、男のくせして、こんな低い跳び箱も跳ばれへんのか」ともう決して言わなかった。「この鉄棒、思い切って尻上げてひと廻りやれ、男やないか。日本男児やないか」とどなりつけるように叱つたりしなかった。それどころか、吉岡先生は、健が——体操服の女の子の彼がきれいな切れ長の二重瞼の眼で吉岡先生の浅黒いいつも神経質に眼をしばたたく

顔をじつとみつめると、眼のやり場に困ったように慌てて眼をそらせた。(ざまあ見やがれ)と健は吉岡先生に内心のことばをぶつつけていた。女の子なのに男の子のように乱暴にことばが口から出た。

ほんとうにもうすべてが平気だった。長沼バクダンが子分のクロチビ、ドンスケ、イシャに下知してみんなでいつせいに健に襲いかかつて、彼を教室のささくれだった床の上に押さえつけて「キンタマ探し」をやつてのけたところで、もともと女の子の健にはキンタマなどないのだ。「あらへん、あらへん、こいつのキンタマあらへん。どこへ行つてしまうたんやろ」と子分のなかのお調子者、オツチヨコチヨイのクロチビが大仰にわめきたてながら、ふり上げたコブシを開いて何かをつかんでいるように見える、いや、そのはずがなかに何も入っていない、まったくの空らであるのを見せつけたところで、健は平気だった。逆に、体操服の上に馬乗りになったクロチビを押しつけながら、「あらへんであたりまえやないの。女の子でキンタマあつたらどうするんや」と大声で言い返した。いや、そのあと、さらに「そんなら、この子にキンタマあるんか。試しはつたらどうや」とつづけながら、頭を大きく振つてオカツパ頭で、健の見幕に怖れをなしたように健の体操服から離れて横にうづくまつたイシャを指した。

そのオカツパ頭の動きは魔法の杖のひと振りの力をもっていた。たちまち、長沼バクダン、クロチビ、ドンスケは健から離れて、イシャに襲いかかり、またたくまに背は高いがヒヨロ長でからだのできがキャシャな、そのひよわさにおいて健とどっこいどっこのイシャは床に組み敷かれた。それこそは「キンタマ探し」のおしおきだ。バクダン以下四人がヒヨロ長のからだの上におおいかぶさつたとこ

ろで、体操服の女の子もあとを追って、白いシャツ・ブラウスの下の濃紺のブルマースから伸びた細い、長い、女の子としてとびりかっこのよい両脚をまっすぐに左右に伸ばして、健もまた馬乗りになって「キンタマ探し」をやり始める。いや、そのうち、「あらへん、あらへん、こいつにはキンタマあらへん、どこへ行ってしもうたんやろ」とコブシを上げて、開いて、わめきたて始める。――

健がイシャを槍玉にあげて考えたのは、「キンタマ探し」を考え出して、長沼バクダンにけしかけるようにして健にむかつてやり出したのが彼だったからだ。本来はヒロ口長でキャシャなからだの持ち主のイシャは、それこそ自分が健のように長沼バクダン一味の攻撃の対象になってふしぎはなかった。しかし、こういう場合、うまいやり方は子分になって一味に加わり、「キンタマ探し」のようなおしおきを考え出しては自分同様、あるいは自分より弱そうなやつに卒先してやってのけることだし、しかし、ときどきは、彼自身が親分バクダンの気まぐれで、自分で考え出したおしおきを自分がやられた。一度は、健がやられたあと、イシャ自身が、「キンタマ探し」をやられた。「ヨワシ、おまえもやれ」とバクダンに言われて、健も参加した。「いやだ」と言えば、またぞろ自分がやられかねなかったからだが、床の上に仰向けに押しえつけられたイシャのkokoroの学生服のズボンのなかに手を入れると、たしかに小さくちぢこまった手ごたえのあるものがあつた。健が力を入れてそれをつかむと、「痛い」とイシャは泣きそうな声を出した。（判ったか）と健はさらに力を入れて心のなかの声を大きく出した。

イシャの父親は医者で、小さいがそれでも門がまえのついた家で医院をやっていた。近くに大きな病院があつてあまりはやつていないらしかったが、それでも医者は医者だ、バクダンの自分のなかではまちがいなく、ええしのボンだった。着ている学生服も同じコクラのものでもあきらかに上等の材質のもので、靴も立派な編上げの革靴を履いていた。うちのおやつさんはヤブや、ヤブ医者やと、イシャはみんなの歡心を買うようにヘラヘラ笑いながら言った。それがどうしたんや、とバクダンとはりあわなかつた。

クロチビの家は洗濯屋だった。イシャの門がまえの少し先の商店街のとつつきの小さな店だ。ときどきクロチビの父親が注文をとり歩いて出くわした。クロチビ同様、顔色が黒い上に小柄で、親子はまったくよく似ていた。クロチビと対照的に大男のドンスケの家はクスリ屋だった。クロチビの洗濯屋のまむかいの店いっぱいに、毛生養生薬ビルグ、南京虫殺虫全滅液、皮膚病大妙薬、タバコキライ、わきが防止剤、最新リン病治療薬ユカイ、いんきん特効薬タラコン、特製衛生スキン、と立て看板やら貼り紙やらをひろげてドンスケの家の「田畑大総合薬局」は店を開いていた。長沼バクダンの父親はただの勤め人で、彼の家にはそんな派手なかまえはなかつた。彼の家は商店街から少し横丁に入った見すばらしい平屋の長屋の一軒だったが、いつもひっそり静まりかえつて見えるバクダンのその小さな家の玄関には、「仕立てします」と筆で下手な文字で書いた紙札がぶら下っていた。「バクダンのおぼはんはあれで内職やつとるのや。あいつとこ子供が多いやろ。おぼはんが働かんとやつて行かれへんねん」とイシャがしたり顔にいつか健に言った。子供はバクダンを入れてたしか七人。それとも八人だったか。「あいつのおやつさんは勤め人言うたかて、ただの工場の職工やで。」こ

の情報に健に耳打ちしてくれたのは大男で、動作がすべてドンくさくのろまなダンスケだった。健は聞きながら、こいつ、おれのことをどう言うとするんやろ、と考えた。

健の父親も会社勤めの勤め人だったが、工場の職工ではなかった。しかし、たいしてえらくないことは父親が大学も専門学校も出ていない、ただの商業学校出身なので見当はついた。家もバクダンの平屋の長屋よりはましな二階屋の三棟つづきの長屋だったから、これもたいしたことはないだろう。父親の会社は証券会社だったが、イシヤは、「ああ株屋かいな」と馬鹿にしきった口調で言った。吉岡先生も、「きみとこは株屋やね」と、これはふつうの口調で言った。「ちがいます。ただの証券会社の勤め人です」と健がムキになって言い返したのは、「株屋」がこれだと思う株に大金を投じて買ってあと何倍、何十倍もの値段で売って大儲けして、エイヨーエイガの暮らしをやつてのける、しかし、ときには失敗して家屋敷を叩き売って夜逃げする人間であることを、本で読んで知っていたからだ。父親はそのどちらでもなかった。朝になると、母親がつくつてくれた弁当を持って家を出て会社に行き、夕方、空らになった弁当箱を後生大事に風呂敷にそれだけ包んで帰って来るただの冴えない勤め人だった。

健には三つ年上の姉がひとりいた。彼女は、いつも、なんでうちはもつと金持の家に生まれなんだやろ、とグチをこぼした。姉はよく少女小説を読んでいた。吉屋信子が彼女のお気に入りだったが、吉屋信子のといわず、そういう小説にはきつと肺病を病む大金持のお嬢さんが出て来るものだが、彼女は肺病になっていなかったし、肌色が抜けるように白い少女でもなかった。元気がよくて、肉づきもよくて、その点では、腕と脚の細い、色も抜けるようではないが姉にくらべて白い、白い皮膚に蒼

い血管が透けて見える健のほうはるかに女の子だった。「あんたは女に生まれたらよかつたんや」と、姉はときどきにくしくしげに言った。「キンタマあらへんのとちがうか」とは言わなかった。逆に、男まざりに大胆に動く姉は、近所のおばさんに、あの子、生まれるとき何かを忘れて来はつたんとちがうか、とかげ口をきかれていた。そう言われたと言つて、そのときには姉は女の子らしく泣いた。肺病病みの大金持のお嬢さんのようにしおらしく泣いたのではなかった。生まれるとき何かを忘れて来た女の子にふさわしく大声で派手に泣きじゃくつた。

健は夢の再現をするように、台所のタライの横に脱ぎ捨ててあつた姉のシャツ・ブラウスとブルマースを着てみたことがあつた。母親も姉も出はらつて留守になつていたときだが、偶然、台所で見つけた姉のその体操服の上下を、かなり長いあいだためらつたあとで（ためらつてゐるあいだ、シャツ・ブラウスとブルマースはただのシャツ・ブラウスとブルマースではなかった。今手に入れなければ永久に手に入らない貴重なもののように輝いて見えた）、健はコクラの学生服の上下とシャツ、パンツまで脱ぎ捨てて、ふるえる手でその貴重なものを身に着けた。今にも誰か帰つて来そうな気がして気がでなかつたが。それでも健は居間まで駆けて行つてすばやく母親の鏡台の鏡に自分の全身を写し出した。たしかに白いシャツ・ブラウスを上に着て、下に濃紺のブルマースを穿いた健はもうコクラの学生服の男の子ではなかつた。しかし、イガ栗頭の彼のその姿はどうひいき目に見ても女の子には見えなかつた。それは何か奇怪な人間以外の他の生き物だつた。鏡台のまえで健はしばらく女の子がするように、いや、夢のなかの彼がいつもしているように腰に手を当てて胸をはつてみたり、ブルマー

スから伸びた細い、長い脚をまつすぐに伸ばしたり、そのままあげてみたりしてみたが、あいかわらず女の子には見えなかった。そこにいるのは、やはり、何か奇怪な人間以外の他の生き物だった。そうかわらず見えた。健は打ちのめされたような気になった。そのうち外で音がした。健は慌てて台所に立ち帰って、すばやく女の子の衣裳一式を脱ぎ棄て、また、コクラの学生服姿の男の子に立ち戻った。立ち戻ったあと、今脱ぎ棄てたばかりのシャツ・ブラウスとブルマースを見下した。それはさつきの輝きを失なつてもうただの汗臭い洗濯物だった。そう見えた。

そこへ帰つて来た母親が顔を出した。「健、こんなところで何してるの」母親はとがめるようにきいた。「何んにもしてへん。喉がかわいたよつて水飲みに来ただけや」と健はゆつくり応じた。

健がバクダン一味からいじめられながら、彼らとつかず離れずの関係にいたのは（そう、彼は自分で考えていた）、まずほかに友だちがいなかったからだ。それから、頭がよくて、「キンタマ探し」を考え出したりするバクダンの参謀役のイシャからよく本を借りていたからだ。ええしのボンのイシャは本もたくさん持つていて、なかには健がこのごろ夢中になつて少年講談も何冊もあつて、健はときどき小さいながら門がまえのある彼の家に出かけて借りて来た。岩見重太郎も里見八犬伝も赤穂浪士の大カタキ討ちもすべて、健はそのイシャから借りた少年講談で読んだ。借りたなかには、このまえの戦争の上海事変のときに、上海のピョウコウチンで、なかの爆薬に点火した長い破壊筒を三人で持ったまま支那軍の鉄条網に突っ込んだ爆弾三勇士の少年講談もあつた。三勇士はそのまま還らぬ護国の鬼と化したのだが、おれも大きくなつたら兵隊になつて爆弾三勇士になるのだといきまき始め

たのは、同じイシャの少年講談の本で三勇士のことを知った長沼バクダンだった。あまりしょっちゅう言うので、渾名も自然にそう決まってしまったのだが、彼の気がかりは、今またせつかく始まった支那軍相手の皇軍の戦争が彼が大きくなるまえに終わってしまわないか——だった。

「終らへんで」と健はうけ合うように言った。べつに根拠があることではなく思いついたことばを口に出しただけのことだったが、そのあと少しうろたえたのは、バクダンが「ほんまか、ほんまに終れへんか」と、いつにない真剣な顔で念を押すように言い返しながら彼を見たからだ。健は慌てて言いなおした。「支那相手の戦争はな、ひとつ終つても、あとまた新しいのが起こるで。東洋平和のためや。戦争はつづくで。」そう吉岡先生がよく教室で口にする「東洋平和のために」を入れてことばをつづけながら、健は援軍を求めるように、「支那事変写真帳」の頁をあちこち繰っているイシャに「なあ、そやろ、戦争はつづくやろ」と声をかけた。「支那事変写真帳」の横長の本は、最近手に入れたものだと言つてさつきからイシャが自慢げにみんなに見せびらかしていた本だ。バクダン一統と健はイシャの家のイシャの部屋で少年講談やら何やらの本を積み上げてしゃべっていた。イシャはええしのボンらしく、他の誰もが持つていない自分の部屋を三歳下の弟といつしよのものながらもつてるのだ。その部屋の彼の勉強机の横にみんなは坐っていた。女中さんがさつきお茶まで持つて来てくれた。いた。

「つづくで」とイシャは健のことばに大きくうなずいて、彼もうけ合うように言つてくれた。「こいつらがわるいねん。判らずややねん。日本の言うことさつきよらんねん。」二枚翼—複葉の戦闘機が爆弾を落としている色つきの写真が表紙の「支那事変写真帳」を開いて、「抗日容共の悪夢に彷彿敗北

支那の領袖達」の活字の下の何人かの男女の写真を指したあと、イシャは「抗日いうのは判るやろ。容共いうのは、アカや、アカといつしよにやるといふことや」とみんなを見まわしながら解説をつけた。右手にひとときわ大きな写真があつて、支那人は支那人だが、日本人のトンビのような大きな外套を身にまとつた中折れ帽の男と、毛皮のついた西洋人の女のオーバーを着た女が写っている。「この二人が特にわるい。」イシャがいばつた口調で言つた。健はうなずいて、「シヨウカイセキとソービレイ」とこれも吉岡先生がいつも教室で口にして二人の名前を口に出した。クロチビとドンスケがちよつと調子をつけて「シヨウカイセキとソービレイ」とくり返した。バクダンは黙つていた。黙り込んだまま、鉛筆で男女の顔に乱暴に何度も×をつけた。

イシャは写真帳の頁を繰つた。城壁の上で皇軍兵士が手を挙げて万歳を叫んでいる写真があつた。そのおとなりは、皇軍の兵士が整列しているまえを二頭の馬で二人の軍服に勲章をきらめかした將軍が歩く写真だ。どちらもが去年昭和十二年十二月の南京陥落のときの写真だつた。まえのが陥落直後の写真なら、あとのは、それから四日経つての入城式の写真だ。二頭の馬の先を行くのが松井石根司令官、あとにつづくのはアサカノ宮殿下。イシャは写真につけられた説明文を読み上げた。しかし、あとの写真はともかくまえの写真はどうもあやしい。こういうときは、あとで兵隊を集めてそういう光景をやらせて写真にとるものだ。うちのお父さんの知り合ひの新聞記者がそう言うつたで、とイシャはもの知り顔につづけた。世の中はそういうもんや、とクロチビが分別顔にことばをはさんだ。健をふくめて、みんなは大きくうなずいた。

「わしらも旗行列したやないか」と忘れていた大事なことを思い出したようにドンスケがだしぬけに

大声を出した。そう言えば、そうやった、と健も思い出した。イシャがそのときの写真もあるで、と頁を繰って、何枚か南京陥落祝賀の旗行列や提灯行列の写真が出た頁を探し出した。まんやかに大きくあるのが、宮城まえの旗行列の写真だ。女学生らしいのが、何百人と集まって、写真で見たことのある二重橋のまえでいつせいに日の丸の小旗を掲げて歩いている。「大阪のはあらへんのか」とバクダンが不満げに言った。「あらへん。大阪は田舎や」とクロチビが機敏に反応したが、それでも「あるで」とドンスケが、ドンくさいのろまな彼に似合わず、小さな写真を見つけ出した。紡績工場の女工たちが鉢巻を締め、「皇軍万歳」ののぼりまで立てて歩いて行く姿の写真だ。「あの日は学校休みになつてよかつたで」とバクダンが言った。「ほんまや、あれで一日儲けたがな」とクロチビがまた機敏に応じた。たしかにわるくない一日だった。午前ちゆうは学校は休みで、午後から学校へ行つて、そこで紙の日の丸の小旗をひとりひとり渡されて、市電の通る電車道の大通りをいっばいにひろがって歩いた。「こんなんやつたら、毎日、チャンコロの軍隊やつつけて、どこでもいいよつて陥落させて欲しいな」といつもは真面目で通っている級長の岡崎までがおどけて言った。健が彼のことばをよく憶えているのは、そのとき彼もそう思っていたからだ。

イシャは「支那事変写真帳」の頁をさらに繰った。どこかの都市の城壁の上で万歳を叫ぶ皇軍兵士の「燦然日章旗輝く」の写真のあとは（イシャは「燦然」を「サンゼン」と正確に読んできかせた。健が読めなかつた字だ。ええしのボンのできのよさに彼は感心した気持になった）、「鬼畜に劣る暴虐支那兵」の写真だった（今度は、「キチク」も「ポウギャク」も健は読めた）。通州の城外に二十九軍の敗残兵が現れ、砲撃を開始するとともに本来は日本側についていたはずの支那の保安隊二大隊も敵

側に寝返つて通州攻撃に参加して、城内に侵入、在留邦人三百数十人のうち実に二百余名を虐殺したのだ。イシャは説明の文章はもう何度も読んでそらんじているのか写真の横の文字は見ないでよどみなくそれだけ言つてから、これが「その支那兵の暴虐のあとだ」とつづけながら、何かの建物の白壁に何十となく射ち込まれた弾のあとを指で指した。みんなはイシャの指が指すままに黙つて写真をみつめた。

「そやけど……」イシャはみんなの沈んだ気持ちを一新させるように口調をかえた。「これ見てみい。」イシャの指は次の頁の写真を指した。「二十九軍全く潰滅」の大きな文字の下（「潰滅」はまた「カイメツ」と健にも読めた。自分で声を出して読んだ。イシャも声を出して読んだから、二人の「カイメツ」は重なり合つた）、武装解除されて小銃やら機関銃やらの兵器を地面に並べたまえにしよういなげに立つ軍服やらふつうの支那服やら種々雑多な服装の敗残兵の写真があり、その横は地面に並べられた小銃、テキ弾筒、機関銃などのロカク兵器の写真だつた。ロカク兵器のほかには、支那兵が背中にかけて背負うべつたんこの刀身の長いナタのような刀が幾ふりかあつて、それが目立つた。「これは青竜刀というんやで」とイシャはもの知り顔に言つたが、もうそれぐらいのことはみんなが知つていた。それだけのことなら、そのまますんでしまつたにちがいないが、イシャが「ヨワシ、ほんまか、それ」とそのことばのあとおどろいた声を出したのは、健が「この刀、おれは持つてるで」と不意に言い出したからだ。イシャはそうかん高い声で言い返してから、健の顔をまじまじと見た。他のみんなも同じようにおどろいて健を見ていた。「ヨワシ、ほんまか、それ」とバクダンがイシャとまつたく同じことばを口に出した。

「ほんまや、おれは持つとる。」健は自信のこもった言い方をした。健のそのことばに気押されたようにみんなはまたしばらく黙つたが、万事にドンくさいのろまなドンスケが、突然、「そんなら、持つて来て見せてくれや」と当然のことばを彼のいつものまのびのした口調でゆつくり言つた。そのことばでようやく気がついたように他のみんなも口々に同じ意味のことばを言い出した。「そんなら、見せてやるがな。待つておれ。今、家に帰つて持つて来てやる。」売りことばに買いことば、健はみんなを見まわしながら宣言するように言つた。いや、まちがひなく健は宣言していた。

青竜刀は、出征していた父親の知人で、このところいくさがひと息ついているのか、召集解除になつて帰つて来たのが、戦場土産に持つて来たものだ。その知人が持つていた株のことで父親はいろいろ世話をしつてやつたらしくて、知人は家に来て、お世話になりましたと父親に何度もおじぎをした。玄関つづきの小さな座敷でのそのさまを次の間でぼんやり健が見ていると、父親の知人は健を手招きして二人の横に来させた。そして、そばの風呂敷を解いて突然、「これ、ボンにあげます」とさし出したのが青竜刀ひとふりだった。「これは、ボン、ほんまに支那兵が使うとつたもんでつせ。あいつらが負けて降伏して来よつたときに、わしが直接俘虜から取り上げてやつたもんや。」父親の知人はそう言つてから、突然、まったく思いがけないおくり物をさし出されてどうしていいものか当惑している健に、「お父さんにはようけお世話になつたんやから、せめてものお札に、ボン、あんたにこれあげますのや」とたたみかけるようにつづけて健の手に受け取らせた。これはほんとうに支那の戦場からのおくり物だと思つと、健は緊張してからだをこわばらせた。それが自分のものになるとは——ま

さに思つてもみなかつた幸運だ。健はさし出された青竜刀の柄を堅く握りしめてお札を言おうとしたが、それでもほんとうにこのままもらつていいものかどうか、許しを乞うようにさつきから横で黙つてしきりに煙草の煙を吹かしている父親の顔を見た。父親は「うん」と軽くうなずき、このまたとなのおくり物は健のものになつた。

あいつ、あんな支那兵の捕虜からタダでせしめよつたもんをうちの息子に持つて来てごまかしよつた、ほんとうなら、あいつが召集されてここにいよらんあいだに、わしはあずかつていた株で大儲けさせてやつたんやで、たいへんなお札をわしにせんといかんとこやつたんや、とあとで父親が母親にブツブツ文句を言つていたという話を、さらにあとで健は当の母親の口から聞いていた。「ほんまに高うついた青竜刀でつせ」と、母親はその話をしたあと、健が後生大事に布にくるんで本棚の上につけてかけた長いナタ刀を見るたびに言つた。「こんなもん、おまえがもろうても何んの役にも立たへんやないの」ともよく言つた。「チャンコロの兵隊さんの刀なんか、もろうてよろこんでるのはあんただけやで」と言つたのは母親ではなかつた。姉だつた。姉はそう言いながら、本棚の上から布にくるんだ長いナタ刀を持つてふりまわした。「こんな刀、斬つても斬れへんのとちがう。」姉は馬鹿にしきつた言い方でまた言つた。

実際、べつたんこの刀身の長いナタ刀はどう見ても斬れそうになかつた。もちろん、これで突いたり、殴りつけたりすればそれ相應に相手に打撃をあたえることはできたにしても、日本刀のようにあざやかに相手の首を斬り捨てたり、胴体をまつぶたつに斬つたりすることはできない。それに健がもらつたナタ刀は刀身のあちこちが錆びていた。支那兵が実際背中に背負つていたとしても、これでは

まず使いものにならなかつたにちがいない。しかし、それでも健がそれこそわがタカラとしてナタ刀を大事だと思つていたのは、それがまぎれもなく支那の戦場から他ならぬ健にじかに届けられた到来物であつたからだ。この物には——とそのころみんなが使い始めていたことばで健は思つた。戦場の匂いがする——そう健は思つた。もちろん、皇軍が勝つて、支那兵を俘虜にして背中の青竜刀を奪い取り、ロカク兵器にする戦場の匂いだ。

みんなのまえで布をひろげて長いナタ刀を取り出してみせながら、健はそうみんなの顔を見まわしてみせながら言つた。たしかにそう自分で言つてみせると、布に包まれているあいだになかにこもつたものらしい戦場の匂いが、強烈にあらためて匂つて来るような気がした。みんなも、バクダン、クロチビ、ドンスケ、イシャそれぞれに同じ匂いを嗅ぎとつたのか、いちように気押されたように黙り込んだ。

そのみんなの沈黙に力を得たように、健は、これはうちのおやつさんの知り合いで兵隊に行つていた人が支那の戦地からおれのために持つて帰つて来てくれはつた物やで、とことの由来を説明し始めたのだが、しゃべつていゝうちに、物が物だけに次第にことばに熱が入つて、この物は敗残兵の俘虜のロカク兵器から取つて来た物やと言う代りに、いつのまにか、そのおやつさんの知り合いが白兵戦の戦場で彼が打ち倒した支那兵の背中からもぎ取つて来よつた物や、という勇ましいものに話はふくれ上り、変つていた。その半ばつくり話を健は全身の力を込めるようにして熱心にしゃべり、みんなもまた、彼と眼のまえに置かれたそのナタ刀という物を交互に見ながら身じろぎしないで聞いていた。

話が終るのを待ちかねたように、バクダンが真剣な顔で「ヨワシ、そやけど、その人、何んでおまえにわざわざこの物、支那から持つて帰つて来てくれはったんや」と訊ねて来た。怒つたようにバクダンは言った。「何んでおれのところに持つて帰つて来てくれはらんと、おまえみたいなやつのところを持つて帰つて来はったんや」と健は彼のことを聞いていた。バクダンばかりではなかつた。クロチビもドンスケもイシャも、みんなが健を見て、それぞれの顔でそう言った。

ここでいつもの健なら、黙り込んでしまつたかも知れない。しかし、今日の彼はちがつていた。眼のまえの彼のタカラの長いナタ刀が彼に力をあたえてくれたように、物のぺったんこの刀身をあらためて見るようにみつめながら、「それはな……」と落ちついた声で言った。自分でもおどろくほど自信のこもつた声が出た。「その人がな、おれに大きくなつたら、こんなしようがない刀持つとる支那兵なんかいくらでもやつつけてくれと思いはつたからや。おれにこの青竜刀くれはつたとき、その人おれにそう言うてはつた。南京攻略のとき、日本刀で百人斬りしはつた少尉がいはつたという話や。その少尉みたいに、こんな刀持つた支那兵をせいっぱいこつちは日本刀でやつつけてくれ、斬つてくれ。……そうこの刀くれはつた人、おれに言うていはつた。」

まつたくの出まかせだったが、ことばは自分で勢いをもつたみたいにくらでも口から出て来た。しゃべっているうちに、自分でもほんとうに父親の知人にそう言われたような気がして来ていた。みんなも健のことばのとめどのない勢いに気押されたように黙つて聞いていた。バクダンまでがまるでそのことばを自分が言われたように「ウン、ウン」と大きくうなずいた。

こういう話が伝わるのは早いものだ。バクダン、クロチビ、ドンスケ、イシヤのみんなの誰が誰にどう言ったか知らないが、健が支那兵が背中に背負う青竜刀を持つているらしいという話は何日かのちには、教室じゅうのみんながそれぞれに知っている話になっていた。同時に、それは「ヨワシ、ほんまか、それ」ということばにもなれば、「そんなら、持つて来て見せてくれや」という頼みにもなる。いや、「持つて来て見せてくれんと、おれは信じん」といううるさいのも、何人か出て来る。健は学校に何度か布に包んだ長いナタ刀を持つて行つた。持つて行つて布を開いては、彼にそのナタ刀がどうして手に入ったかのいきさつをしゃべることになるのは当然のことだ。そして、しゃべるたびに、健の話は少しずつふくらみ、變つて、おしまいには、青竜刀は父親の知人が白兵戦の戦場で打ち倒した支那兵の背中からもぎ取つて来たのから、それもただの白兵戦の戦場ではない、彼が単身敵の塹壕に飛び込んで支那兵を打ち倒して背中から奪つて来たというさらに勇ましい青竜刀に變つていた。この勇ましい話のあとは、もちろん、その由緒ある青竜刀がどうしてまた「ヨワシ」の手に渡つたか、という話になる。そこでの健の話は、最初にバクダンほかのみんなにしゃべつたのと變りはなかったが、前段の青竜刀の由来が勇ましいものになればなるほど、後段の健が大きくなつてこうした刀を背負つた支那兵をやつつけてくれ、日本刀で斬つてくれという願ひあつて、父親の知人が健にその青竜刀ひとふりをわざわざ支那の戦場からはるぼると持つて帰つて来てくれたのだという話もいつそう輝かしいものになった。

級友は、誰も彼もが健の話を気押されたように黙つて聞き入つてくれた。「持つて来て見せてくれんと、おれは信じん」とはじめ言つていたうるさがたまで、青竜刀の現物をまえにしてはもう何も文

句を言わずに聞いていた。なかには、バクダンのように、自分が大きくなったら、この刀を背負った支那兵どもを思う存分やつつけてくれ、斬ってくれということばを聞いたように「ウン、ウン」と大きくうなづくのもいた。それを見て、健はほんとうに自分がそのことばを言われたような気持ちに自分でもあらためてなつた。大きくうなずき返した。

健は自分が強くなつた気がしていた。自分がその気持になれば、みんなもそう考え出したにちがいない。バクダン、クロチビ、ドンスケ、イシャだけではない。教室中のみんなもだ。もうバクダン一味であれ他の誰であれ、健の腕と脚が女の子のように細い、長い、白いことを言い立てる者はいなくなつていた。バクダン一味のお得意の「キンタマ探し」もこのごろはもう彼らも健相手にやろうとしていないように見えた。吉岡先生も「おまえ、男のくせして、こんな低い跳び箱も跳ばれへんのか」と言わなくなつていた。鉄棒の回転ができなくて、「男やないか、日本男児やないか」と吐りつけられることもなくなつていた。これは、どちらもが、健ができるようになって来ていたからだ。もちろん、すべてが青竜刀のせいだとは言えなかつたにちがいないが、ただ、どこかにそれはかわつていた。健はそう思つていた。そう思つて、長いナタ刀を思い浮かべるといつそう元気が出た。そうも思つた。逆に健は、バクダン一味の尻馬に乗つて、たとえば顔色がわるいので青ビヨウタンと呼ばれる健よりもイシャよりもさらにからだのできがキャシャな土井を一味といっしょに襲つて「キンタマ探し」をやつてのけた。そのときには、いつかイシャに「キンタマ探し」をやつてのけたときのように、「ヨウシ、おまえもやれ」とバクダンに凄まれてやつたのではなかつた。自分から進んで一味の「キンタ

マ探し」に加わった。

いつのまにか健は女の子になった夢を見なくなっていた。今でも、ときどき、寢床のなかで女の子になった自分を思い浮かべることがあった。しかし、そこにはすぐ、いつか実際に姉のシャツ・ブラウスとブルマースを着たときの、それを母親の鏡台の鏡に写し出したときの自分のぶざまな姿が出て来て、ぶちこわしになった。いくら鏡のまえで白いシャツ・ブラウスの短かい袖から突き出した腕を動かしたり、濃紺のブルマースの下に伸びる脚を伸ばしてみたりあげてみたりして女の子らしいしぐさをしてみたところで、女の子には決して見えない、イガ栗頭の奇怪な生き物がそこにはいるだけだった。健は記憶の画面に残ったその奇怪な生き物の姿をふり払うように頭を何度もゆさぶつたが、何度ゆさぶつても、いつかのオカッパ頭になった彼の両頬に垂れ下った髪の毛がゆさゆさと揺れるやわらかな感触はいつまで経つても感じることはできなかった。

そのうちいつも彼は眠ってしまっていた。白いシャツ・ブラウスと濃紺のブルマースの彼が眠り始めるとともにそのまま夢のなかに入って行くことはもうなかった。夢はかわらず見たが、もうそれは女の子の自分の夢ではなかった。自分が夢のなかに出て来ても、もういつも男の子の自分だった。男の子はどんなに高い跳び箱でもやすやすと跳ぶことができた。どんなに高い鉄棒でもくると何度でも回転することができた。吉岡先生がいつのまにか来ていて、「高木、よくできた。おまえはそれやから男や。日本男児や。大きくなったら兵隊になって、どこへでも行ってたたかえる」と讚めてくれた。「ハイ、どこへでも行ってたたかいます」と健は元気よく応じた。

健の夢は今そんなふうにはろがり、動いた。

駅のむこうの古道具屋には、青竜刀なんかいくらでも売っているという話を仕入れて来て、みんな——バクダン、クロチビ、ドンスケ、そして、健にしゃべったのはイシャだった。イシャの父親の患者にイシャが心やすいのがいて、イシャが健の青竜刀の話をすると、「ボン、そんなもん、あの店でいくらでも売つていよるで」と言い出したというのだ。「そんなことあるか」ととつぎに健は大声を出した。「そんなことあるらしいで」とイシャも大声を出した。二人が言い合うのをとめたのはバクダンだった。「そんなら、とにかく見に行こうやないか」と彼は落ちついた声で言った。

イシャの家で、みんなはまた集まつていた。みんなは、バクダンのことばで、玄関に思い思いに脱ぎ棄てていた靴やら下駄やらの履き物を履いた。健は行きたくなかった。何か理由をつけて脱げ出そうとしたが、バクダンは許さなかった。「ヨワシ、おまえも来るんや。おまえもいつしよに来て、青竜刀が古道具屋にいくらでも売つているようなガラクタかどうか、わしらといつしよにたしかめるんや」といかめしい顔で言い出していた。「行くで。おまえに言われんかて、おれは行くで」と健は大声を出してくり返した。

青竜刀がただのガラクタなら、そんな物ぶつは白兵戦のなかで、いや、敵の塹壕に決死の覚悟で飛び込んで支那兵の背中から奪い取つて来る値打ちはなかった。まして、健に支那兵をやっつけて日本刀で叩き斬る覚悟をもたせるために支那の戦場からはるばる持つて帰つて来る値打ちはなかった。すべてはそこらの古道具屋で見つけて買つて来ればすむだけの話だ。健が駅のむこうの古道具屋までみんな

と歩いて行くあいだ考えていたのはそうしたことだが、そうなれば、父親の知人がくれた青竜刀にかかわって健がこれまでこしらえ上げて来た長いナタ刀の由緒も、それが彼の手に入った由来も、たちまち崩れてアホみたいなことになる。健はこわくなった。このところ感じとつたことのない怯えを健は歩きながら感じとつていた。

古道具屋の主人は、青竜刀はお店においてあるのかというイシヤの質問にニヤニヤ笑うだけで何も答えなかった。健は彼が何も答えないことを心のなかで懸命に祈ったが、イシヤはその情報を教えてくれた彼の父親の患者の名前を出し、父親自身の名前も出して、しつこくきいた。「じゃ、見せたいわ」と最後には、でっぶり肥った、いかにも古道具屋の主人らしい男は、木箱をひとつ持つて来た。なかに長いナタ刀が無雑作にいくつも投げ込まれていた。「ほんとうはこんな支那の戦利品、売るとうるさいのやけど、戦地から帰って来はる兵隊さんがいくらでも持つてきはりますのや」と男は弁解がましく言った。その男のことは終つたところで、みんな——健を除くみんなはいっせいに健を見た。みんなは黙っていたが、「ガラクタヤ」とバクダンがケリをつけるようにひと言言つたあとで、「ヨワシ、おまえの青竜刀はどうやねん」と訊ねた。「ちがう」と健は大声で言つて、大きくかぶりをふるうとしたが、声は思つたほど出なかつたし、かぶりをふる頭の動きも今ひとつだつた。涙は辛うじてこらえた。こらえることができた。

それに、わるいことは重なるものだ。夕方、夕食の席で、健は珍しく早く会社から帰つて来た父親の口から、何かの話のついでに、彼に青竜刀をくれた父親の知人が輜重兵だつたことを聞いた。輜重兵なら、後方からいくさの前線へ荷物を運ぶ兵隊のことで、白兵戦にはまつたく縁がない兵隊だ。ま

して、塹壕に飛び込んで決死の戦闘をすることはあり得ない。

夜、また寢床のなかで、彼は女の子になろうとした。女の子になって、そのまま安心して眠りに入り、夢のなかに入って行こうとした。

しかし、いくら努力して白いシャツ・ブラウスと濃紺のブルマース姿の自分を思い浮かべようと努力しても、彼の閉じた眼に映像として浮かび上つて来るのは、男とも女ともつかぬイガ栗頭の奇怪な生き物だけだった。いや、それは、もうただのお化けだ。そうとしか見えなかった。そのうち、その無益な努力で健は疲れはててしまったものらしい、突然ザツクリと切れ目をつけるみたいに眠りが来た。夢は見たことは見たが、錯綜した画面がつづくだけの判らない夢だった。あとにただ長い夢を見たという疲労だけが残った。

健はまたバクダン一味を怖れて暮らし始めた。彼らとはあいかわらずつかず離れずでいたが、いつまた「キンタマ探し」をやられるかも知れなかった。彼らがこわくなかつたつい先日までが遠い夢のなかのできごとであつたように思えて来た。

学校からの帰り道、学校近くの空き地で健は偶然彼らと行き会つた。バクダン、クロチビ、ドンスケ、イシヤの彼らみんながいた。そこは材木などの建築材料を置いた空き地だったが、「キンタマ探し」のかつこうな場所でもあつた。とつぎに健はそう判断したが、彼らの首領のバクダンも同じ判断をつけたにちがいない。出会いがしらに「よう、ヨワシ、こつちに来い」とバクダンは大声を出した。健

は動かなかつた。逃げもしなかつたが、彼らに近づくこともなかつた。立ち止まって、彼らの次の動きを待った。緊迫した数瞬間のあと、バクダンが「やれ」と下知を下すのと同時に健にむかつて動き出したとたんに、「兄ちゃん」と叫びながらバクダンの弟——何人もいる弟のなかでもつとも彼に年齢が近接しているのがバクダンの背後に駆けて来た。「今、ぼくは兄ちゃんの学校に兄ちゃんを探しに行つて来たんや。」弟は苦しげに息をしながら声を出した。「お母はんがな、兄ちゃんにな、早う帰つて来て、そう言うていはる。」弟はたどたどしい言い方をした。「何んや、用事は……」とバクダンは弟をふり返つて不機嫌に言つた。「お父はんにな、さつき赤紙が来たんやがな。」心が動顛しているのか、弟はたどたどしい言い方をつづけた。一瞬、バクダンのからだが棒立ちになつて動きをすべて止めたように見えた。「あんな、赤紙いうたらな、召集令状のことや。お父はんにな、その召集令状が来たんや。」弟はさらにくどくどとたどたどしい言い方をつづけようとした。「判つてるがな。」バクダンは怒つたように弟に言い、そのあと、みんな——健をふくめてのみんなにむかつて、「おれは帰る」とことばを乱暴にぶつつけるように言い残して、みんなに背をむけて歩き出した。「ほんまか、それ」とか「えらいことやな」とか、みんなはいろんなことばを思いつくままに繰り出したが、バクダンは黙つて歩いていく。彼の背丈の三分の二ぐらいの弟があとを追いかけた。「キンタマ探し」はもうなかつた。始まるまえに終つてしまつていた。健はホツと息をついた。

数日後、駅でバクダンの父親の出陣式があつた。正式にどう言うのか健は知らなかつたが、駅の構内の人の集まりの中心にいた町内会長の老人がそう言つていたから、それでいいのだろう。二十人ほ

どが来ていた。そのうち十人近くが、バクダンの兄弟、姉妹たちだ。風邪をひいたと言つてイシヤは来なかつたが、あと、クロチビ、ドンスケは来ていた。健も、クロチビに「行つてやれや」と言われて来た。

出陣式が始まるまえに、もの知り顔にどこかの国民服姿のおじさんが、昔は、出征いうたらたいへんでしたで、町内会の人みんながやつて来て晴れのか、ど、でを祝うたもんですが、そやけど今日は——と二十人を見まわしながら言つた。今日は、あんまり派手にやつたらいかんらしいですと横のロイド眼鏡の顔色のわるい男が応じた。このごろまた出征が多いでつせ、いくさのぐあいがよくはないんですやろか、とロイド眼鏡は声を低くしてつづけた。しかし、まあ、あの人は昔兵隊に行つていた人や、上等兵やつたそうやから、新兵さんとちがう、しごかれんとすみまつせ、と横からまたべつの男が口を出した。健はこの男は知つていた。商店街の下駄屋だ。しかし、あの人、どこへ連れて行かれますんや、と下駄屋はつづけた。支那ですがな、とロイド眼鏡が、判りきつたことをきくな、と言わんばかりに少しいばつた口調で言い返した。しかし、支那のどこやろ、と下駄屋が言い返した。この下駄屋のことばにはロイド眼鏡の返事はなかつた。町内会長の話が始まつていたので。

町内会長はかつては地元の有力量で、市議の選挙にまで打つて出たほどの男だが、落選しておまけにそのあと病氣になつて、元氣のないただの老人になつていた。そう健の父親がいつか健に教えてくれていたが、たしかに頼りなげなただの老人だった。彼も国民服を着ていて、いかめしく「この戦局多難のおり……」と大声で始めたが、あとはつづかなかつた。ボソボソと口のなかでしゃべつて、まったく冴えなかつた。ただ、おしまいに彼が口にしたことは健をおどろかせた。「無事凱旋のおりには、

この町内を代表する者としてこれはずいともお願いしたいことではありますが、支那兵の青竜刀を戦利品として多数お持ち帰り下さいまして、町内の子供みんなに分配していただきたい。……これはずいぜいお願いしたいことで……」彼はみんながそこで笑い出すことを期待したにちがいないかったが、口のなかであいかわらずボソボソしゃべったのがいけなかったのか、誰も笑わなかった。健も笑わなかった。その町内会長の青竜刀持ち帰りの頼みのあと、バクダンの父親が二十人のまえに国民服にタスキをかけた姿で立つて、ひと言、「では、行って参ります」と言つて、挙手の礼をした。「万歳！」とロイド眼鏡が手をあげて唐突に叫んだが、誰もつづく者はいなかった。彼は黙り込み、おずおずと手を下げた。

小さな駅の改札口わきの構内だ。そこはたしかに万歳三唱にふさわしくない場所だったが、これは出陣式も何もないものだ。健は、昔小さいとき絵本で見たどこか田舎の駅の出陣式のさまを思い浮かべた。

たくさんの見送り人が駅前広場に集まって来ている。日章旗や軍艦旗やその他「祝××君出征」と大書したノボリや旗が何本も立っている。それが一頁目にあつて、二頁目が羽織ハカマの地元有力者の演説、三頁目が国民服まがいの服を着たその「××君」の「行って参ります」の挙手。そして、四頁目は万歳三唱。みんなが手を挙げ、そのまわりではハトまでが飛ぶ。

ここにはその光景の出現はなかった。田舎の駅なら、××君はそこから何時間も汽車に乗つてどこかの都市の兵営に行くのだろう。しかし、この駅はただの省線電車の駅で、改札口から二階の高架のフォームに上り、そこから電車に乗ると、十五分も乗れば大阪駅に着いてしまうのだ。そして、電車

はいつもみんなが通勤やら通学に乗っているただの電車だ。

出陣式はそのまますぐ終わった。バクダンの父親はただの電車に乗り、改札口からなかに入り、すぐ階段を上った。バクダンの母親だけが父親について行った。二人の姿が階段の踊り場の上って横に折れて消えたところで、二十人の人の塊りは呆気なく崩れた。

改札口の横にそこだけ取り残されたようにバクダンら、彼の一家の子供が一行に列をつくって立っていた。全体の数は七人だったか、それとも八人だったか。健はその途方にくれたような子供の列に近づいて行って、列のとつつきのところ立ったバクダンに、何んと言えいいのか判らぬままに、「終ったな」と背後から声をかけた。バクダンは不意打ちをくったように肩をびくつかせてふり返って、「終ったで」と同じことばで応じた。バクダンは沈んだ顔をしていた。これまでに健が見たことのない顔だ。「おまえ、お父はんに凱旋のとき青竜刀持って帰って来るように頼んだんか」と健は彼を元気づけるようにわざとらしくはしゃいだ声を出して言ったが、「頼むもんか」とバクダンは怒った声で言い返した。「ヨワシ、おれがそんなこと頼むと思うか。」バクダンはさらに大声でつぶけたが、その大声も、わざとらしく「ヨワシ」と健の渾名を叫んだのも、どちらもただの強がりをやってみせているだけのことに健には思えた。あとバクダンは押し黙った。黙りこくって、何かそこに途方もなくおそろしいものでも見えて来ているかのようにバクダンは怯えた眼で健の背後をみつめつづけた。そのうちその眼に光るものが見えて来た。涙だと健はすぐ見当をつけたが、同時に、こいつは今弱つていよる、まだそこらをウロウロしているクロチビやドンスケをけしかけてバクダンを襲ったら、彼相手の「キンタマ探し」は成功まぢがいなしと意地悪なことを考えた。

男と女

男と女のちがいがあるのは判る。それは性のちがいというものだ。男女七歳にして席を同じゅうせず、ということもある。コーシ様という昔の支那のえらい人が言つて弟子に教えたことばだ。いつもしかめ面をして考え込んでゐる、そう見える浮田おじいさん先生がそう教えてくれた。まだ若いのにそんなアダ名がついたのは、そのしかめ面のせいだ。おまえらはもうとつくの昔に七歳を越えてゐるがな。だから、学校にも男子組、女子組の区別がある。ちがいがあつた。そうおじいさん先生は教えた。組の誰がそんなことを質問したかどうかは敏雄は憶えてゐない。おじいさん先生の答のほうはしつかりと憶えていた。

男はヒゲが生える。七歳を越してもまだ生えないが、もつと大人になると生える。いや、中学に入ると、顔はまだまだ子供くさいのに、敏雄の二軒隣りの家の中学に入つてからはいつも澄まし込んで、以前のように敏雄にろくに声をかけて来ない佐々木邦夫のように子供くさい顔に十分ヒゲが出て来ているのがある。しかし、女はいくつになつても生えない。なぜ、生えないのかと敏雄は母親にきいてみた。アホらし、と母親は即座に言つた。「女やからやらないの。」そのあと、「そんなアホなこと考えんと、勉強しよ」と小言がつづき、「このあいだの試験の成績、あれは何んや」といつものお説教が始まつた。しかし、男はヒゲは生えるが、お乳は小さい。ない、と言つていいほどのものだ。年をとつても、大きくなるらない。女のお乳は年とともに大きくなる。大きくなるはずだ。今年六歳になる四つ角のパン屋の娘のサヨちゃんのお乳は、まだあの子は小さな女の子だから敏雄のお乳同様べつたんこの平た

いお乳だが、いつか上半身裸かで遊んでいるあの子の姿を見たときそう見えていたが、佐々木邦夫の姉さんのお乳はもうかなり大きくなっているのにちがいない。佐々木邦夫の姉さんはセーラー服がきれいなお嬢さん学校の府立の女学校に一番の成績で入ったという人だが、もうたしか三年生になつていて、そのきれいなセーラー服の制服の胸のあたりはかたちよく盛り上つている。敏雄はすでにそれだけの観察をときどき道で出会う彼女についてすませていた。

しかし、もつと大きなお乳をもっているのは敏雄の家の二階に下宿して、そこから北浜の貿易会社に、タイピストのお勤めに出ている田代さんだ。ずっと小さかったころはいざ知らずこのごろは敏雄は絶えて母親のお乳を見たことはないが、昔の記憶で言えば、母親のお乳はしなびてだらりと下に垂れ下つていた。田代さんのはちがった。はちきれそうに大きくまるまるしていた。いつか田代さんが母親といつしよにお風呂屋さんからユカタ姿で帰つて来て、二人で縁側で涼んでいたとき、田代さんのユカタのまえがはだけて、その拍子にはちきれそうに大きいまるまるしたものが見えてしまった。べつに敏雄は見るつもりはなかった。見えてしまったのだ。

「あら」と田代さんは軽く叫んで、さつきから右手に持つて湯上りの上気した顔を扇いでいたうちわを投げ捨ててまでして慌ててはだけたまえを両手でかき合わせたから、彼女は同じ縁側にいた敏雄に見えてしまったことを知っていたにちがいない。

湯上りの上気した顔がさらにあかくなつた。奇妙なことにいつしよに敏雄も顔をあかくした。頬が火照つた。顔だけではなかった。まるで自分が見られてしまったように恥ずかしさで全身が熱くなつた。

男には、これもまた大人の男のことだが、スネに毛が生える。女には、大人の女でも、スネに毛は

なかった。どこにも毛のない女の人の脚はスベスベしてきれいだ。そのスベスベしたきれいな脚になか透けて見える肌色の薄い絹靴下を穿くと、脚はいつそう細くきれいに見える。田代さんは敏雄の家から毎朝出勤に出るときはシャツと洋装をして、脚には絹靴下を穿いて出かけた。そのときの彼女のうしろ姿はきれいだった。スカートから下に突き出た二本の脚はどちらも絹の光沢の光る細いきれいな脚で、それが朝の明るい陽光のなかを元氣よく交互に前方にむかつて動いて遠ざかつて行く。敏雄は息をのんで、見とれた。

男には、そんなきれいに絹靴下を穿いた、スベスベ光る脚はなかった。誰も彼もがズボンを穿いていた。黒いズボン、焦茶のズボン、太いズボン、細いズボン、粗いぶあつい生地 of ズボン、薄いペラペラのズボン、いろいろあつたが、ズボンはズボンだ。うしろ姿を見ていて、息をのむことはなかった。まして、見とれることはない。

つづきは製品版でお読みください。